# 審 査 結 果 の 要 旨

| 報告番号 | 乙 第 2790 号 | 氏名 | 坂本 慶博 |
|---|---|---|---|
| 審査担当者 | 主 査 鹿毛政義 (印)<br>副主査 坂本照夫 (印)<br>副主査 白水和雄 (印) | | |

主論文題目：Effect of Helicobacter pylori Infection on Esophagogastric Variceal Bleeding in Patients with Liver Cirrhosis and Portal Hypertension
（門脈圧亢進を伴う肝硬変患者における胃食道静脈瘤出血にヘリコバクターピロリ菌が及ぼす影響について）

審査結果の要旨（意見）

胃・食道静脈瘤（静脈瘤）の破裂は、門脈圧亢進症の合併症の中で最も重要な疾患であり、時に致死的となる。近年、静脈瘤の破裂に対して様々な治療が開発され、ほとんどの症例で止血は可能となり、静脈瘤の破裂の予防的処置についても研究は進んでいる。本論文は、肝硬変患者における静脈瘤出血とヘリコバクターピロリ菌（Hp）の感染との関連に着目した独創的な研究である。研究結果は、Hp 感染が、食道・胃静脈瘤出血に対して予防的な効果があることを示唆するものであり、その機序に関わる要因として、Hp 感染による胃粘膜の萎縮、それに伴う胃酸分泌低下を指摘している。病理学的には、通常、Hp 感染の胃粘膜は炎症が強く、静脈瘤は破綻しやすい印象を受けるが、本研究の結果は、これに相反するものであり、大変興味深い。

HHp 感染が静脈瘤出血を抑止する可能性を示した本研究は、臨床的に意義あると考える。

論文要旨

静脈瘤出血は肝硬変患者には依然として致命的なイベントである。今回、食道・胃静脈瘤出血に対する H. pylori（Hp）感染の影響を検討した。対象は当病院に食道・胃静脈瘤治療のため入院した 196 名の肝硬変患者で、急性出血 95 例、予防的治療 101 例である。 Hp 感染の診断には Urea breath test を用い、また Pepsinogen(PG) ⅠとⅡおよび PGⅠ/Ⅱ比を測定した。その結果、食道・胃静脈瘤出血は Hp 感染患者(86 例)の 34.9%(30 例)に，非感染患者(110 例)の 59.1%(65 例)にみられ、両群に有意差(P<0.0007)がみられた。食道と胃出血例では Hp 感染率に差はなかった。PGⅠと PGⅡ及び PGⅠ/Ⅱ比は出血患者群、非出血患者群間で差がみられた。即ち Hp 感染例では有意に出血例が少なく、酸分泌が低下していた(P<0.001)。多変量解析の結果では Hp 感染と食道・胃静脈瘤出血との間には負の相関が認められた。この結果から、Hp 感染は胃粘膜萎縮による酸分泌低下を介して食道・胃静脈瘤出血に対して予防的な影響を与えていることが示唆された。